

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

CHIN Sam Ath

論 文 題 目

Impact of School Principals' Leadership on Teaching Quality and Students' Achievement:

A Case Study of Primary Schools in Phnom Penh, Cambodia

(校長のリーダーシップが教育の質と生徒の学習成果に及ぼす影響
—カンボジア国プノンペン市の小学校の事例研究)

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 山田 肖子

委員 名古屋大学 教授 岡田 亜弥

委員 名古屋大学 准教授 内海 悠二

論文審査の結果の要旨

カンボジアでは、学校教育の就学率の増加、退学・留年率の低下など、教育制度の普及及び内部効率性を示す数値は改善しているものの、国際テストなどに見る就学児童・生徒の学習成果に向上が見られず、依然として教育の質が課題となっている。この教育の質を改善するために、教師の能力を高めること、また教師がより良い教育実践をするための学校長のサポートが重要と考えられている。

そこで本論文は、教師が校長からサポートを受けていると感じる場合に、それが教師の教育実践や生徒の成績に相関しているのかを明らかにすることを目指した。調査対象として、カンボジア国首都のプノンペン市内にある 38 校の小学校を学校区ごとの学校数を満遍なく代表するよう無作為抽出し、そこで第 6 学年を担当している 54 名の教師、1,878 名の 6 学年生徒を対象に、質問紙調査を行った。また、調査対象校の校長からは、校長自身の職務経験や教育歴などの属性、学校の立地や就学者数などについての情報提供を得た。さらに、質問紙から得た教授・学習過程に関わる要因が生徒の学習成果に影響するかを分析するため、調査対象となった各教員が教室で独自に行った理解度テストの成績も収集した。

本論は、7 章で構成されている。第 1 章は全体の導入、第 2 章はカンボジアの初等教育の制度、実践の概観、第 3 章は文献レビュー、第 4 章は調査手法の説明であり、主な分析結果は、第 5 章、第 6 章で提示された。第 7 章は結論となっている。

本論文調査では、校長による教師へのサポート(リーダーシップ)と、教師の教育実践に関して、教師自身の認識を問う 5 段階リッカート尺度を用いた詳細なデータ収集を行った。校長による教師へのサポートについては、6 つの質問項目、教師の教育実践については、8 つの質問項目につき、それぞれ主成分分析を行い、そこで得られた合成変数を「校長のリーダーシップ」と「教師の教育実践」の変数として以降の分析に用いた。第 5 章では、質問票から得たこれらの変数に加え、生徒に対する家庭での学習支援や社会経済的背景、教室の生徒数などのデータを用い、生徒のテストの成績を従属変数として階層モデルによる回帰分析を行った。生徒の社会経済背景などの変数の影響を制御したうえで、生徒の学習成果に対し、「校長のリーダーシップ」も「教師の教育実践」も統計的に有意な正の相関があることが示された。

生徒の学習成果に対して、校長と教師の役割がそれぞれ確認されたうえで、今度は、校長のリーダーシップが教師の教育実践にも影響を及ぼしているかどうかを確認するため、「教師の教育実践」を従属変数とし、校長のリーダーシップ、教師の経験や教師間の相互協力などを説明変数とする最小二乗法回帰分析を行った。この分析から、教師の教育実践が向上するために、校長のリーダーシップと教師間の協力が重要であることが証明された。

第 6 章では、主に定性的なインタビューデータを用いて、校長のリーダーシップ⇔教師の教育実践⇔生徒の学習成果がそれぞれ正の相関を示す理由について踏み込んだ分析を試みた。その結果、校長のリーダーシップの中でも、特に(1)校内視察、(2)専門的学習コミュニティの強化、(3)学校での協働とコミュニケーションの強化の 3 つの側面から、教育実践の質に影響を与える可能性があることが明らかにされた。さらに、教師の実践の向上には、同僚との協力関係が重要な意味を持つことが明らかにされた。

なお、本博士論文のテーマに関連した論文は、既に「国際開発フォーラム」誌に単著で掲載されて

論文審査の結果の要旨

いる。

2. 本論文の評価

本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

- 本論文のデータは、教師及び生徒の認識を問うリッカート尺度を多用した結果、回答傾向に個人差が出にくいという根本的な難しさがあった。しかし、そうした中でも論文提出者が諦めることなく、様々なデータ処理方法を試して一貫した議論にまとめ上げたことは評価に値する。
- 定量分析から示された要因相互の関係を説明するために定性的なデータを関連付け、より現場の状況に根差した議論を試みたことは評価できる。

ただし、本論文は、以下の点において改善すべき点があることが指摘される。

- 教師に対する質問票以外のデータが十分に収集できておらず、事後的に追加できた情報で一定の分析を行うことができたものの、学校レベルで校長のリーダーシップや教師の教育実践がなぜ重要なのかを理解することを可能とする変数が十分にあったとは言えない。
- 定量分析では説明しきれない状況を、定性分析で補うことが求められたが、インタビューデータのコーディングと定量分析の変数の関係が明確ではなく、結果的に、コーディングに基づく精緻な分析とは必ずしも言えない分析者の印象や経験に頼った説明が散見された。

このように限界はありつつも、本論文は、学校運営の重要な要因である教師の活動に対する校長のモニタリングや教員間の相互協力などにつき、カンボジア国プノンペンの事例を用いて実証的に有意性を示している。学校や教室運営について、2,000名近い教師の認識についての質問票データは独自性も高く、学位申請者の今後の研究に活かされることと思われる。このことから、本論文は、博士論文として期待されるレベルには十分に到達していると判断される。

3. 結論

以上の評価により、本論文は、博士（国際開発）の学位に値するものであると判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。